
黒龍記

春風亭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒龍記

【Nコード】

N2919I

【作者名】

春風亭

【あらすじ】

時は紫帝歴2年。皇帝獅紫の治める菜花の国で関勇は少年と出会う。いずれ国の運命を変える少年は関勇に微笑みかける。天により親に捨てられ、天に生かされた一人の少年の物語。

第1話

どれ位の時間が過ぎたのだろうか…

空腹はいつの間にか頭からこぼれ落ち、昼と夜の移り変わりに興味
がなくなった。

ここに来た時に父親は言った。

『いいか龍太…ここを動くんではないぞ…
すぐに迎えに来るからな…』

何時も大きな声で怒鳴り散らす父親は、優しく言った。

『うん…ここにいる…』

後ろで母親は泣いている…ここから動けば大好きな母親を困らせる
事がわかってる。

ぼくはすてられたんだ……

………

ここは【采花の国】（さいかのくに）の東の果て。

一度踏み入れば、出る事が困難な森。

黒髪の小さな龍太りゅうた呼ばれた男の子は木に寄り掛かり、虚ろな目で座っていた。

九歳の身体は痩せ細り、自分がいつ眠っているかも分からなくなつた頃だつた。

ガサッ

目の前の茂みが動く。

龍太の前に、初老になろうかという男が現れた。

「なんてえ目えしてやがる。」

男は龍太を見るなり言った。龍太の薄く開いた目の中の瞳はもはや本来の黒色は失われ、全てに絶望しているかの様な儚い灰色になっている。

龍太は少し目を見開き、微かに笑つた。

「ごめんね…僕はもう皮だけになってしまった。

それでも良いなら、食べるといいよ。僕はもう

眠るから…」

龍太には男が獣に見えたのか、そう言つと静かに目を閉じた。

……………

男の名は関勇せきゆう。

齢にして60を数えるその身体は、歳に似つかわぬ筋肉で覆われて

いる。長髪の白髪を後ろで縛り、胸まで伸ばしたヒゲはどこか気品さえ感じさせる。

関勇は龍太を自分の山小屋に連れて行きベットに寝かせた。決して広くない小屋には、狩りに使うような弓や刀、また無造作に本が置かれている。

「さて、どうしたもんかのう…」

日も暮れて、龍太に薬を調合した長旅用の栄養剤を無理矢理飲ませて、関勇は呟いた。ある程度の予想はついていた。この大陸は今、三つの国によって治められている。そのひとつ采花の国は、古くから神々が住まう国である。

政治、軍事全てにおいて、神の啓示に従い国を治められている。10年前、時の皇帝【赤闌】（せきらん）は啓示に従い【一家一子の法】を制定。

『人が増える事で国は衰退する。天の啓示に従い一家につき一子とする』

啓示を唯一聞く事が出来る皇帝の一言で、多くの子供が捨てられた。

「いよいよ狂った世の中になりやがったなあ」

関勇はそう呟き、龍太の方を振り返る。

「しかし妙なガキだな…」

そう、森には沢山の子が捨てられる。通称【捨て子山】。捨て子の多くは一日とたたず獣の餌食になるはず。

「この様子だと一週間は経ってるな…」

それほど龍太は痩せ細っている。しかし関勇はどんな状態であれ、生きて見つけた事に驚いていた。

「天に生かされたか…」

自然にそう思えた。この数年この森では起こり得ない事だと、身をもって知っている。まさに奇跡に近い。

「小僧…お前はあの時確かに死をうけいれていた。

だが天はお前に用があるらしい。それがいい事か

はわからんがな……」

与えられし命は天の加護か…

または狂いし世を生きる苦しみか…

紫帝歴2年…世は皇帝【獅紫】（しし）が治める采花の国。

山が雪化粧を纏う少し前の出来事だった。

第1話（後書き）

拙い文章ですが宜しくお願いします。勢いで書いたもので、いろんな小説の影響を受けてますが、ご容赦くださいまし。

第2話

『龍太は生まれつき身体が弱い。今の生活ではどちらにしろ長くは生きられん。』

『でもこの子はまだ生きてます！何か方法が…』

『ない？もしあるならっ？……あるなら…皆、子を捨てにここまで来るものか……』

父親の背に負われながら、龍太は眠った振りをしていた。向っているのは日ごろ近付いてはならないと、固く言われている森。

泣きじゃくる母親と、それを諭す父親の会話を聞きながら、龍太は眠った振りをする。起きてはいけない。自分が捨てられる事を理解してはいけない。

だから、『ここにいろ』と言われた時も笑顔で『うん』と答えた。

でも心のなかで、もしかして迎えにきてくれるかも…と、どこかで思っていた。その気持ちも三度目の夜がきた時には無くなった。替わりに時々犬みたいなのが遠くから僕を見ている。その時からその犬が何故自分を見ているのかだけに興味を持ちだした。

母親は森に入ると食べられてしまうとずっと言っていたが、僕を食べにきたんだろうか。でも何故近付いて来ないのだろうか？

この森にはこの犬しかいないのだろうか？もう何日めかわからないが龍太はこの犬にしかあった事がない。

『早く僕を食べたらいいのに……』

目の前から茂みの音がした。目が霞んで良く見えないけど、また君なんだろう？でもごめんね、もう僕は君を満足させる程の身体では無くなった。

ああ…眠いなあ…

もう起きれそうにないや……

………

「おっ！気がついたか？」

目を開けると今までいた森ではなく小さな小屋で寝ていた。何十年も経っているのか所々隙間がある木の小屋で、その場しのぎのように木の板で補強されている。それでも隙間風は入って来るが、今までいた場所に比べれば天国のようだ。

天国？やはり僕はあの森で死んだのか？

龍太は自分の状況が掴めず、関勇と部屋の様子をキョロキョロと見ている。

「ここはわしの小屋だ。お前を拾って連れて来たんじゃないよ。」

関勇の言葉にまだ不思議そうな顔をする龍太。

「ああ…わしの名は関勇。この森で…まあなんじゃ…えゝ
木こりみたいな事しとる」

そう言うと、龍太にホットミルクを渡す。

「あの…えつと…」

ミルクを受け取った龍太は関勇をまっすぐ見つめて、

「とても嬉しいのですが、僕はあの森に
いなきやいけないんです。」

と、無表情で言った。

「……………なんじゃて？」

「おとうさんがあそこにいなさって…おかあさんが
泣いてて…あそこにいないとおかあさんがきつと…
困ると思うんです。」

関勇は驚いた。この子は、

「あそこにいれば、迎えが来ると思うか？」

「……………うん。迎えに来れないと思います。
だからおかあさん泣いてたんだと思うんです。」

気付いている。

幼いながら自分が親に捨てられたことを…

自分があそこで死ぬことが家族の為であると、幼い心で受け止めているのだ。

関勇は龍太を抱き寄せる。目からは涙がこぼれ落ちる。

「セキ…ユウさん？…ごめんなさい…せつかく助けくれたのに…でも、戻らなくちゃいけ…」

「戻らんでいい！！！」

関勇の言葉に龍太は驚き固まる。

「いいか？お前はあそこに戻る必要はないんじゃない」

抱き寄せた龍太を離し、真っ直ぐ目を見て優しく言う。

幼いこの子に、決心に難しい説明は無意味だった。ただ、ただやさしく繰り返す。

「戻らなくていいんじゃないよ…」

「でも…」

「戻らなくていい…」

無表情だった龍太の顔が少しずつ崩れていく。

「ほんとに？…もど…もどらっ…んぐっ…もどらなくてもいいの？」

「ああ……生きて……いいんじゃないよ?」

「う……う……うああああああ!」

ようやく、九歳の子供の表情になった龍太は大声を上げて泣きだした。

関勇はまた優しく、抱きしめた。

抑えていた感情が、親に捨てられた悲しみ、幼くして母親に会うことが許されない喪失感、また飢餓による死への絶望が一気に溢れ出だす。

その深い哀しみを表すように、龍太は泣きつづけた……

関勇は胸の中に龍太を抱きながら、この世の理不尽さに怒りが込み上がる。

本来、天の啓示は民が道を間違わぬように、幸福をもたらすように皇帝を通して伝えられる。

ではこの少年の哀しみはなんだ?この涙が、叫びは天には届く事はないのか?

関勇は強く龍太をだきしめ、

「やはり天意は捻じ曲げられている。」

そうつぶやく。

……

「起きたか？」

いつの間にか泣き疲れ寝てしまった龍太が起きると、関勇は優しく話しかける。

「うん……」

すっかり子供らしい表情になった龍太に、関勇は安心し一つ溜息をつく。

「改めて自己紹介しようか。ワシは関勇じゃ。おぬしの名は？」

「りゅうた……です。」

「りゅうたか。うむ、良い名じゃ。」

「おかあさんがつけてくれたの。龍のように
つよくなりなさいって」

そついうと龍太は少し悲しそうな顔をする。
母親を思い出してるんだろうと関勇は思い、こう言う。

「良いか…おぬしには辛いかもしれんが、おぬしは生まれ変わらな
きゃならん。」

母にも会う事はできん。これからは名を新しくし、母の願いに答え
強く生きるんじゃ。」

「あたらしいなまえ？」

「うむ。考えたんじやが…龍関というのは
どうじゃ?」

「りゅう…かん?」

「そうじゃ。母の願いを込めた“龍”に、これから家族になる
わしの一字の“関”をとって龍関じゃ」

「家族になる…?」

「うむ。今日からおぬしとわしは家族じゃ!
どうじゃ?」

龍太改め“龍関”は子供らしい笑顔で頷く。

「そうか!では改めて宜しくな龍関!」

「うん!」

紫帝歴2年。たった2人の家族になった【関勇】と【龍関】。
外はすっかり雪が積もり、銀世界へと姿を変えていた。

……そして月日は流れ

舞台は紫帝歴10年に移る……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2919i/>

黒龍記

2010年12月15日02時26分発行